

<早川徳次翁の生涯>

常務理事 村尾光裕

生い立ち～奉公

早川徳次翁は明治 26 年(1893 年)11 月 3 日東京日本橋生れ。氏は生後間もなく母親が病に倒れたため、1 歳 11 ヶ月のときから養父母に育てられた。養家の義父は人は良いが酒飲みで経済的には貧困だった。2 年後に義母が急病で他界。その翌年に 19 歳の後添がきて、幼い氏(徳次)につらくあたった。やがてこの義母に子どもができ、イジメがひどくなっていった。養子縁組の契約に従って小学校には入学させてもらったが、夜遅くまでマッチ箱張りの内職を手伝い、睡眠不足でしかも空腹が満たされない日々であった。このままでは命も危ないと感じた隣人(目の不自由なおばあちゃん)のお世話で、金属加工の町工場へ住み込みの奉公に出ることになった。小学校は 2 年生で中退。満 8 歳の時である。爾来約 10 年間に亘り奉公生活を体験した。(早川翁曰く”自分には学歴はないがその代わりに実歴を得た”と。)奉公の仕事は朝早くから夜遅くまで厳しいものであったが、辛抱できたのは逃げて帰る家もないし、何よりも三度の食事をさせてもらえ、僅かながら給料(小遣い)がもらえたからであった。

独立～関東大震災

満 18 歳(大正元年、1912 年)のとき、バンドのバックル(”徳尾錠”と命名)を発明し、大量の注文がきたのが契機で独立した。独立に必要な資金は取引先の社長が氏を見込んで出資してくださった。独立して 3 年後に結婚(21 歳)。その翌年の大正 4 年にシャープペンシル(金属繰出鉛筆)を発明した。当時は和服を着る人が多く、洋服向きのシャープペンシルは出足不調であった。

いろんなタイプのペンシルを作り、営業に努め、徐々に売上は伸張り工場も拡張、数年後には従業員も 200 人に達した。30 歳の頃である。そして一。

大正 12 年(1923 年)9 月 1 日午前 11 時 57 分。かの関東大震災に遭遇。工場は焼失し、奥さんと子ども(7 歳と 5 歳の男の子)を失った。自らも火の海の中を川へ逃れて約 7 時間、橋の台石につかまっていた九死に一生を得た。その 1 ヶ月後、筆舌に尽くせぬ傷心の氏に対し、大阪のシャープペンシル特約店から保証金(二万円)の返済要求が来た。事業一切を烏有に帰し、返済するお金はない。仕方なく焼け残った機械とシャープペンシルの 48 種類の特許を譲渡し、大阪へきてシャープペンシルの製造を指導することで保証金を返済することとした。指導期間は 6 ヶ月で、この間は月給 150 円のサラリーマンであった。

再起～ラジオ

翌大正 13 年(1924 年)9 月 1 日、「早川金属工業研究所」を設立。東京で事業に関わってくれた従業員と地元採用者合わせて 10 名程で大阪での再起をはかった。仕事は万年筆の付属金具や歯科治療の材料の製造であった。その頃アメリカ製の鉱石ラジオを手にする機会があり、分解研究してみたら自分にも作れそうなので事業として取り組むことになった。

大正 14 年(1925 年)の春、国産第 1 号の鉱石ラジオの組み立てに成功。その 6 月に JOBK 仮放送所が最初の電波を流し、見事試作のラジオが受信した。(従業員一同興奮状態だった由である。)早速量産・販売を開始し、ラジオ受信機事業は順調に拡大していった。

昭和 10 年株式会社に組織変更、昭和 17 年早川電機工業株式会社に社名を変更。しかし、昭和 18 年頃から太平洋戦争の影響で資材不足となり、ラジオ生産が思うに任せない状況となった。

戦後不況～テレビ

昭和20年(1945年)終戦。(満51歳)殆どの企業、国民は厳しい状況下に置かれていたが、同様会社経営は容易ではなかった。特に昭和24年～25年の金融引締め政策により不況の色が濃く、他の要因もあって80社あったラジオメーカーが殆ど倒産して18社に減った。会社は正に存亡の秋、窮地に追い込まれた。氏(早川社長)は苦渋の決断をせまられ、人員整理と銀行からの融資で、何とか危機を脱出した。

その後朝鮮動乱があり、民間放送の開始もあって景気が回復、ラジオの売上も上昇し会社は持ち直した。

ラジオの次の事業として、テレビに注目していたが、昭和26年(1951年)にテレビ受像機の試作に成功。翌27年渡米してRCAと技術提携し、昭和28年国産第1号白黒テレビを製造販売。いち早く量産体制を築いた。(昭和29年育徳園保育所開設。理事長に就任。満60歳)

昭和30年以降も不景気や困難期はあったが、国産第1号の電子レンジ、世界初のIC電卓の開発・発売など会社は概ね順調に推移していった。

昭和45年(1970年)社名をシャープ株式会社に変更。その年の9月社長を辞任し会長に就任した。満76歳のときである。一応一線を退いたが引き続き社業や公務に精励すると共に社会福祉関係の仕事にも傾注した。

昭和48年早川徳次の半生を描いた小説「遠い星」(原作 石浜恒夫氏)が演劇化され大阪道頓堀の朝日座で1ヶ月間40回上演された。(翌年東京有楽町の読売ホールで再演)

昭和51年育徳園保育所を移転・新築。その年早川翁は勲二等瑞宝章を受賞。

昭和55年1月入院、6月24日永眠。(満86歳)

早川徳次翁が創業したシャープ(株)は液晶と太陽電池で更に飛躍しており、創設した育徳園保育所は地域福祉、老人福祉分野にも少しずつ事業を広げながら着実に歩んでいる今日である。

早川翁の福祉の原点

早川翁の幼少期は前述の生涯で触れたように義母から想像に絶するイジメを受けていた。

見るにみかねた同じ貧乏長屋に住む井上という目の不自由なおばあさんが、8歳の氏の手をひいて奉公にて行ってくれた。氏は晩年になっても「その時の温かかった手のぬくもりが忘れられない。自分の生涯の門出盲目の井上さんによって開かれた。」と語っていた。井上さんに対する感謝の気持ちが早川徳次翁の奉仕の動機、福祉の原点である。